

## 日本書紀を読むということ

國學院大學 渡邊 卓

### はじめに―『日本書紀』とは

六国史りくこくしの一つ。奈良時代に完成した日本最古の勅撰の正史。神代から持統天皇までの朝廷に伝わった神話・伝説・記録などを修飾の多い漢文で記述した編年体の史書。30巻。720年（養老4）舍人親王らの撰。日本紀。『広辞苑』

### ▼養老四年（七二〇）五月癸酉（二二日）『続日本紀』

一品舍人親王奉勅修日本紀。至是功成、奏上紀卅卷・系図一卷。

一品舍人親王の勅を奉じて日本紀を修む。是に至り功成りて、紀三十巻と系図一卷を奏上す。

### ▼天武天皇十年（六八一）三月丙戌（一七）『日本書紀』

丙戌ひのえいぬのひに、天皇、大極殿おほきんどのに御して、川嶋皇子・忍壁皇子・広瀬王・竹田王・桑田王・三野王・大錦下上毛野君三千・小錦中忌部連首・小錦下阿曇連稻敷・難波連大形・大山上中臣連大嶋・大山下平群臣子首に詔して、帝紀及び上古の諸事を記し定めしめたまふ。大嶋・子首、親ら筆を執りて以て録す。

### 一、『日本書紀』の享受史

#### ▼講筵

・平安時代に宮廷の公的行事として行われた『日本書紀』講究の集會。

養老五年（七二一）

弘仁三年（八一二）六月二日〜同四年『日本後紀』

承和十年（八四三）六月一日〜同十一年六月十五日『続日本後紀』

元慶二年（八七八）二月二十五日〜同五年六月二十九日『日本三代実録』

延喜四年（九〇四）八月二十一日〜同六年十月二十二日『日本略記』

承平六年（九三六）十二月八日〜天慶六年（九四三）九月『日本略記』

康保二年（九六五）八月〜終講は不明『日本略記』

### ▼「日本書紀私記（日本紀私記）」

各回の博士が講義の前後に作成した覚書とみられ、単に『書紀』の語句に訓注を施したものと、記事内容についての質疑応答を逐次筆録したものとがあるが、現在は四種（甲・乙・丙・丁）の不完全な伝本があり、このうち甲本は弘仁私記、丁本は承平私記とされるが、その他は年代が不明。ほかに『釈日本紀』『和名類聚抄』その他に多くの逸文がある。

### ▼日本紀竟宴

朝廷において『日本書紀』を講じた後に催された宴会。「竟宴」は終わりに催す宴会の意。その宴で『日本書紀』の神・天皇・人について詠まれた和歌が、のちに成書化されたものを『日本紀竟宴和歌』という。熊本市本妙寺蔵本（重要文化財）は鎌倉時代の書写の卷子本で、後世伝本の祖本となる。二巻。上巻に元慶六年（八八二）・延喜六年（九〇六）兩度の和歌、下巻に天慶六年（九四三）度の和歌、計八十三首（作者七十四名）を載せる。

▼『和名類聚抄（倭名類聚鈔）』

平安中期の漢和辞書。十巻本と二十巻本とがある。源順編。承平四年（九三四）頃の成立。醍醐天皇皇女勤子内親王の令旨によって撰進された。天地・人倫など部門別に漢語を掲出、出典・音注・証義を示し、和名を万葉仮名で記す。和漢の典籍からの引用が豊富。百科事典としての機能も果たし、その資料的価値は大きい。和名抄。

▼『釈日本紀』

鎌倉時代中期に著わされた『日本書紀』の注釈書。卜部兼方（懷賢）著。二十八巻。成立年は未詳であるが、兼方の父兼文が文永十一年（一二七四）―建治元年（一二七五）に前関白一条実経の『日本書紀』神代巻に関する質問に答えたことが文中にみえ、正安三年（一三〇一）転写の奥書があるので、その間に成立したものと考えられる。鎌倉時代の卜部氏は古典研究を家学とし、『日本書紀』の講読を行っていたが、兼方は、平安時代初期以来『日本書紀』を講読してきた諸博士の説と、卜部氏の家学を集大成して本書を著わした。現在では散逸した古典が数多く注釈に引用されている点で評価される。伝存しない『日本紀私記』が多量に引用されているので、それ以前の『日本書紀』研究の状態を知る手がかりを与えてくれる。

巻一「開題」

解説に相当。

巻二「注音」

難字句の音を記す。

巻三「乱脱」

分注などの位置を正し、読み方を指示する。

巻四「帝皇系図」

国常立尊から卷三十持統天皇までの系図。

巻五く十五「述義」

難語句の意味を諸書・諸説を引いて述べる。

巻十六く廿二「秘訓」

秘伝的な古訓を記す。

巻廿三く廿八「和歌」

歌謡を排列し、適宜注解を施す。

二、「日本紀の家」

▼『太平記』巻第二十五

その後、平野社神主、神祇大副兼員じんぎたいふかねかずを呼んで宣玉のたまひけるは、「神代の事は、何いかにも日本紀にほんぎの家にぞんち存知すべき物なり。

▼卜部氏

- ・卜部氏には平野家と吉田家がある。卜部神道の創始者である兼俱は吉田家。
- ・卜部氏によって書写された『日本書紀』は卜部本系と称される。（↑↓古本系）
- ・卜部本系の代表的なものとして兼方本（弘安本）、兼夏本（乾元本）、兼右本がある。

三、国学者の『日本書紀』訓読

▼荷田春満『仮名日本紀』

荷田春満『日本書紀或問』 仮名日本紀の事

或人問、釈日本紀に仮名日本紀ハ何人の作れるやといふ問有、今の世にも仮名日本紀といふ物有や、先生ハ見給へるやいなや。

答云、此事先生に問ひし時、釈日本紀の師説とていへる天慶の説にいはいはく、此書をよまんだめに私に所注出なり。作者いまた不詳とあれハ、釈日本紀の比まてハ正しきかな日本紀といふ物有たるなるへし。今世に伝ふる所の仮名日本書紀三十巻あれとも、皆かなちがひを書て古書にあらずとのたまへり。もし正しき古書の仮名日本紀あらば、訓読のたすけにすぎたる物なかるへし。おしいかな、いますてにたえてなければ訓読の証明かたき事をほしとのたまへり。

#### ▼賀茂真淵『日本紀訓考』

賀茂真淵書簡（明和六年正月廿八日）鈴木梁満宛

一、神代巻の訓にいとわろき事多し、こは既にいふか如く古言をはよくしらぬ人の訓の交じりし故也、所々の訓註の○<sup>〔有がイ〕</sup>如くによむへし、今の人々は字を追てよめど、古へは訓を本にて字はから文体に加えしなれば、古言を得、古文を得て後、文字の奴の如くつかひて、或は字を捨て、或は字よりも多く、或は言を少くなど訓こと也、是も万葉等を得て後はみつから知給ふへし、古事記の今訓いとわろき所多ければ、年月になほしたる本有、是はかの信幸また土万呂かたに有をかりて改められよ、そも又古書なれば塵を払ふが如く、見ることにわろき事も出来ぬれば、いまた必とはいひかたかれど、凡は古へにかなふへし、是をもて紀をもよみ給へ、紀にもおのれか訓あれと、いまだしき事有らば、今しばし、過ずはかしまいりかたし、此訓の事、おのれ四十年はかりの願にて改めぬれと、猶清う定めかぬめり、文字も誤り多く、文もみたれて、前後せる所も落し所も少なからず、然るを後世の学者流は、本文をはそらに見やりて、空理を作りて強てその所々に加ふる故、よく論ふときは一つとして古へにかなへるはなし、多は儒仏の意也、いかでかわが朝の人代の古へをつくさずして、神代を伺ふ事を得んや、よりて己れは四十年願へて人代を凡につくして神代に及へり、ことし七十三の齡にて身おとろへ、心しれ行ぬれば、今はせんすべなかれど、命の限りとして朝夕つとめ侍るのみ、

#### 四、現代の『日本書紀』訓読

##### ▼岩波書店『日本古典文学大系』 昭和四二年（底本、兼方本・兼右本）

古に天地未だ割れず、陰陽分れざりしとき、渾沌れたること鶏子の如くして、溟滓にして牙を含めり。其れ清陽なるものは、薄靡きて天と為り、重濁れるものは、淹滞りて地と為るに及びて、精妙なるが合へるは搏り易く、重濁れるが凝りたるは竭り難し。故、天まず成りて地後に定る。然して後に、神聖、其の中に生れます。

##### ▼朝日新聞社『日本古典全書 日本書紀』武田祐吉 校 昭和三三年（底本、彰考館本・前田家本など）

古 天地のいまだ割れず、陰陽の分れざりし時、渾沌れたること鶏の子の如く、溟滓りて牙を含めりき。その清陽なるもの薄靡きて天と為り、重濁れるもの淹滞りて地と為るに及びて、精妙なるが合ひ搏ぐは易く、重濁れるが凝り竭るは難ければ、天まず成りて地後に定まる。然る後に神聖その中に生れましき。

#### 『日本古典全書』解説

日本書紀の本文は漢文体で書かれてゐる。これを如何やうに読むべきかといふに、数種の方法が考へられる。これに就いては、一、普通の漢文と同様に、達意を主眼として読むべきか、二、古伝本等に附せられてある訓に依つて読むべきか、三、本書成立当時の訓法を求め、これに依つて読むべきか等の方針の問題がある。このうち第二の、古伝本に附せられてある訓に依つて読むことは、実際に世上に行はれてゐる所であるが、それは要するに平安時代乃至鎌倉時代の語法及び語彙に依るものであつて、古風でも無ければ、達意でも無い中間的な訓であるから、採用し難い。古写本等に附せられてゐる訓は、参考としては貴重な資料であるが、これのみに頼つて読むことは無意義である。然らば、第一の達意に依るべきか、第三の古風に依るべきかといふに、これは両立するのであつて、読む時の目的に依つて、いづれでもよいのである。（中略）さてなるべく純粹な国語に読まうとするに当つて、文の基調を為す問題として、まづ考へねばならぬのは、時の表示如何である。日本書紀の大部分は、過去の事実を記述して居り、これに僅少の、今は何何といふ現在の事実が附記せられてゐる。

## 折口信夫の訓読

古、天地未だ割れず、陰陽分れざるとき、渾沌たること鶏子の如く、溟滓して牙を含めり。其の清陽なる者、薄靡して天と為り、重濁なる者、淹滞して地と為るに及んで、精妙の合搏すること易く、重濁の凝竭すること難し。故、天先づ成りて地後に定り、然る後に神聖其の中に生ず。

折口信夫・西角井正慶・藤井貞文・鈴木棠三・波多郁太郎・藤井春洋・高崎正秀「神功皇后紀輪読」

(『國學院雜誌』第四十六卷第二号(昭和十五年一月))

折口 此から輪読の題目にします日本紀の本文の訓み方は、出来るだけ漢文訓みで行った方が本道ぢやないかと思ふ。ぜひとも國文脈で訓まねばならぬ場處は、ちやんと本文自身にその用意がしてあるのですから、そこはなるべく純國語式に訓むといふ風にして。

## 『折口信夫全集』ノート編「日本紀」

ただいまのでは、どこまで養老のものを伝えているかわからぬ。平安朝どころか、奈良朝ばなれた訓み方もあるゆえ、独立している単語の訓み方は、時代的だが、句、文の訓み方のうえに、日本のものをみるのは、無理である。それは動脈硬化となっており、漢字は、熟語のものほど多い。日本語は、漢語と妥協して訓めぬ。直訳の訓み方にもならぬのであるし、純粹な日本の訓み方でいうと、不自然なものになる。

## おわりに―辞典に見る『日本書紀』

### ▼小学館『日本国語大辞典』

あか・つき【暁】〔名〕(「あかとき」の変化した語)

(二)夜半過ぎから夜明け近くのまだ暗いころまで。未明。また、夜明けに近い時分。現在では、明け方のやや明るくなった時分をいう。

\*日本書紀(720)仁徳三八年七月(前田本訓)「時に二の鹿、傍に臥せり。鶏鳴(アカツキ)に及ばむとして牡鹿(しか)牝鹿(めか)に謂ひて曰く」

あしき奴(やつこ)

謀反を起こして残虐な行為をする悪人。

\*日本書紀(720)景行一二年九月(寛文版訓)「唯、残賊者(アシキヤツコ)有(はべ)り」

しみのもの

(二)「しみ(染)のきぬ」に同じ。

\*日本書紀(720)持統二年二月(北野本訓)「新羅の調賦、金・銀・絹布(かとり)〈略〉并て別に献る所の仏の像・種種の彩絹(シミノモノ)・鳥・馬の類、十余種」

(三)古代の絵の具。丹(たん)などの高価な塗料。

\*日本書紀(720)推古一八年三月(岩崎本平安中期訓)「曇徴は五経を知れり。且能く彩色(シミノモノ)及び紙墨を作り、并て碾磑(みつうす)造る」

\*日本書紀(720)持統二年二月(寛文版訓)「霜林が献れる金・銀・彩色(シミノモノ)・種々の珍異しき物」